

## 鉛の思想から黄金の思想へ : 錬金術師ツアラトゥストラ

東司, 昌子  
九州大学大学院 : 博士課程 : 倫理学

<https://doi.org/10.15017/1430878>

---

出版情報 : 哲学論文集. 37, pp.105-124, 2001-09-25. 九州大学哲学会  
バージョン :  
権利関係 :

## 鉛の思想から黄金の思想へ

——錬金術師ツアラトウストラ——

東 司 昌 子

### 序

ニーチェ『ツアラトウストラはこう語った』<sup>(1)</sup>の根本思想は永遠回帰思想である。<sup>(2)</sup>『ツアラトウストラ』において永遠回帰思想が最も重要な形で明確に主題化される章が、第三部「幻影と謎」であることは、おそらくすべての解釈者が認めるところである。しかし、ニーチェ没後百年を過ぎてても、この章は解明され尽くしたとは言えない。それは同時に永遠回帰思想解釈にも言えることである。永遠回帰思想は、一八八一年八月ニーチェを襲った。それはツアラトウストラという構想の始まりでもある。永遠回帰襲来と同時期に次のような遺稿がある。

「パラケルスの驚くべき事ども (Paracelsi mirabilia)。／ (読んだり聞いたたりした事の) 可成りによる自分の言葉で語り直し。——私がかつて見て聞いた事のすべての驚くべき事の内、最も不思議な事の一つ——パラケルススが私にそれを物語るのだが——そして私はただ獅子のように勇氣ある心だけでなく、子羊のように無垢な忍耐をもまた持たねばならない。ち

ように自ら担わなくてはならないように、伝えねばならない。というのも、そのまやかしは、私にとって悪しき意志を持つ  
靈のまやかしであると仮定すれば、私にとって一つのより邪悪な誘惑 (die Versuchung) では決してないだろうからだ。そ  
して、それは語った、私に現れてくるもの、それは真理—— (KSA:9,480, II [111] Frühjahr — Herbst 1881)

FNとは、ニーチェのことであろう。ニーチェはパラケルススについて若い頃から知っている。<sup>(3)</sup>だが右記のパラケルスス  
に関する遺稿は突然現れる。しかも永遠回帰思想を得た時期に、好意を込めてある種の決意表明として記されたのはどうい  
う意味を持つのであろうか。この遺稿は永遠回帰思想・ツアラトウストラと関係するのだろうか。パラケルススは錬金術に  
ついて代表的人物である。錬金術は、基本的には鉛から黄金へという黄金生成術である。これを『ツアラトウストラ』に見  
出すことが出来るだろうか。ニーチェには、錬金術師としてのツアラトウストラという構想があつたのではないだろうか。<sup>(4)</sup>  
そうであるとするれば、永遠回帰思想というツアラトウストラの根本構想にそれを見出さねばならない。これか本論の課題で  
ある。永遠回帰思想を説明するために本論は、第三部「幻影と謎」に定位する。というのは、同章に鉛、賢者の石といった、  
錬金術的モチーフが認められるからである。更に、永遠回帰思想は黄金に彩られている。これらを説明することによって、  
永遠回帰思想の錬金術的側面が明らかにされ、最終的には前記の遺稿の意味も解釈される。

## 1 黄金で飾られた永遠回帰思想

最初に本節では、黄金の思想としての永遠回帰思想を明らかにする。黄金は、『ツアラトウストラ』の中でなぜあのように  
肯定的なもの、それも「最も高い価値」(KSA:4,97)を持つものとして描かれているのか。例えば、永遠回帰思想が、ウロボ  
ロスをモチーフとしていることは明らかであるが、黄金には何か特定の象徴が意図されているのだろうか。この問題に対し  
ても、錬金術的背景から答えを出すことができる。ウロボロスの蛇にしても、錬金術において多用され好まれる象徴である。

まず、『ツアラトウストラ』において黄金という象徴がどういう意味を持つか確定することから始めよう。

永遠回帰思想を暗示する第四部「正午に」において、永遠性の泉や世界の完成が、黄金の丸い輪、黄金の丸い球として描かれている。

「世界は今まさに完成 (vollkommen) したのではないか？ 丸くなり、熟したのではないか？ (Rund und reif) おお、黄金の丸い輪 (Oh des goldenen runden Reits) — 一体これはどこへ飛んでゆくのか？ 私は追い掛けよう！ すばやく！ / 静かに — —」 (KSA.4.344)

第四部「正午に」においてツアラトウストラは正午頃、夢を見る。その眠りの内で、時間が飛び去り、永遠の泉に落ちたツアラトウストラは、世界が完成したというあまりの幸福に心臓よ砕けよ、と語る (KSA.4.344)。世界の完成は、「黄金の丸い輪」という象徴で語られる。また、一度起きたツアラトウストラは、再び眠りに入ろうとする。その時彼は次のように語る。

「私を放っておいてくれ！ 静かに！ 世界はまさに今完成したのではないか？ おお黄金の丸い球を追い掛けよう！ (Oh des goldenen runden Ballis!)」 (KSA.4.344)

すなわち彼の眠りは永遠性の泉に浸ることであり、そこへと誘う核心が、世界の完成であり、それは黄金の丸い輪 || 黄金の丸い球という形象によつて表わされているのである。世界の完成と永遠性の泉は、永遠回帰思想を示唆している。

世界の完成は、第四部「夜を彷徨う者の歌」 — それは真夜中である — においても語られる。すなわち、黄金の丸い輪とは永遠回帰思想の肯定的側面における同じものの回帰の輪である。世界の完成・正午と真夜中が一つであるというのは、「夜を彷徨う者の歌」第十節において語られる。このように、永遠回帰思想の肯定的側面には、黄金というモチーフが重要な場で登場する<sup>(5)</sup>。

また、黄金の丸い球は、第一部「自由な死について」において語られる。

「私自身はこのように死にたい、つまりお前達友達が私の意志のために大地をより愛するようになるように。(中略)／まことに、一つの目標をツアラトウストラは持っていた、彼(ツアラトウストラ)は彼(ツアラトウストラ)の球(Seine Ball)を投げた。いまやお前達友達は私の目標の継承者であれ。お前達に私はこの黄金の球を投げ渡す。／一切のことにまましてなお、私の友達よ、お前達がこの黄金の球を投げるのを見たいのだ！そして、私はまだもう少しの間この大地にとどまる。私にそうさせよ。」(KSA.4.95f.)

ツアラトウストラが投げる黄金の球は、ツアラトウストラの目標である。そしてその球を投げ渡された者は更にその球を投げるのだから、これは、永遠回帰思想の教師が教えを告知し、告知された者が更に教えるということである。ツアラトウストラの目標は、永遠回帰思想の告知である。彼は「永遠回帰思想の教師」であり(KSA.4.95f.)、教師は、教え子・継承者を必要とする。教え子はツアラトウストラの子供たちと言われる者達である。

ここで心に留めておくべきことは、黄金の球を投げ渡すことが永遠回帰の教師ツアラトウストラの目標であり、永遠性における世界の完成は黄金の丸い輪に喩えられる。更に、黄金の球は黄金の丸い輪と同じである。永遠回帰思想は、黄金に裝飾されているのだ。

第一部最終章「贈与する徳」は、贈与する徳、大いなる正午における没落、ツアラトウストラの三度の下山など重要な思想が語られている章である。ここにおいて永遠回帰思想と黄金は、第一節第一段落(左記引用)から登場する。「贈与する徳」という章は、黄金の永遠回帰思想を表わすモチーフに導かれている。

「彼の弟子達はしかし、別れに際して一つの杖を彼に手渡した。その黄金の握りには太陽の周りに一匹の蛇が巻き付いていた。ツアラトウストラはその杖を喜び、そしてそれにもたれた。そうして、彼は次のように彼の弟子達に語った。」(KSA.4.97)

ツアラトウストラは贈与する徳(KSA.4.97)について語るが、それは、永遠回帰思想のモチーフの姿をしている。

「この新しい徳（贈与する徳）は、権力である。それは一つの主であろうとする思想であり、その周りを一つの賢い魂が巻き付けている。つまり、一つの黄金の太陽とそれに認識の蛇が巻き付けているのだ」（KSA.4.99）

贈与する徳という思想の周りに一つの賢い魂が巻き付けているとは、ツアラトウストラが弟子達にもらった杖の黄金の握りにあるモチーフ、すなわち「太陽」に「一匹の蛇が巻き付けている」図柄と同じである。太陽は、序説第一節から明らかのように贈与する徳を表わす形象である。蛇は、賢い魂といわれていることから、ツアラトウストラの動物達（鷲と蛇）の蛇である。蛇は太陽の下で最も賢い動物であるからだ（KSA.4.27）。しかし蛇は同時に、一般にウロポロスの蛇として永遠回帰思想を象徴していると考えられている。ウロポロスの蛇は黄金色ではない。また、蛇は重く黒い蛇として永遠回帰思想の克服の場面に登場する。このように、蛇は永遠回帰思想を表わすが、ここではその蛇が黄金である。賢い魂といわれる蛇は、最大の知恵である永遠回帰思想を認識する賢さであると考えられるだろう。とにかく、蛇が太陽を取り巻いているという象徴が永遠回帰思想を表わし、それが黄金であるということに注意を喚起しよう。

しかし、太陽と黄金については、『ツアラトウストラ』序説を想起させる。『ツアラトウストラ』の序説第一節において、ツアラトウストラの下山は太陽が没落する様に喩えられている（KSA.4.12）。太陽は「あふれるほど豊かな天体」であり、富める者が与えることの喜びを表わす。

「私は贈り物として与えたい（verschenken）そして分配したい。（中略）／そのために私は深みへと降りて行かねばならない。お前（太陽）が夕方にするように、お前が海の向こうに行き、また下界（die Unterwelt）に光をもたらすように、お前、あふれるほど豊かな天体よ！」（KSA.4.11）

太陽は、贈与する徳を体現する形象である。ツアラトウストラが下山＝没落することについて、彼は太陽に対し「祝福せよ」と言う（KSA.4.12）。

「この杯（der Becher）を祝福せよ、あふれ流れようと欲するこの杯を、水が黄金色をして杯から流れ、いたるところにお前

の歡喜の反射を運ぶためにあふれ流れようと欲するこの杯を。」(KSA.4.12)

杯とはツアラトウストラのことである。ツアラトウストラは太陽のように人間達に贈与するのだが、その様子が「黄金色」であると表現されている。

序説第一節の最後の言葉は、「—このようにツアラトウストラの没落は始まった」(KSA.4.12)であるが、第四部最終章「徴」においてツアラトウストラが最後に下山する際(三度目の下山)も、ツアラトウストラの様子は、太陽に喩えられている。<sup>(6)</sup>彼は彼の子供達とともに大いなる正午を迎えるのだが、これは、前述の第一部「贈与する徳」における予告の成就である。

「贈与する徳」第三節において、ツアラトウストラは次のように言う。

「そしていつかまた、お前達は私の友となり、そして一つの希望の子供となるべきである。その時私は三回目のこととしてお前達の側にいるだろう、お前達とともに大いなる正午を祝うために。／そして、大いなる正午というものはこういう時だ、そこにおいて人間は人間の軌道の真ん中に立っている、動物と超人の真ん中に立っている、そして夕暮れへの彼の道をして行く者は自分自身で自分を祝福するだろう。彼が彼方へと渡って行く者であるだろうからだ。そして、彼の認識の太陽は、彼にとって正午にあるだろう。」(KSA.4.102)

ツアラトウストラがもらった杖の黄金の握りの図柄は太陽に蛇が巻き付いたものである。太陽が黄金であるのは、贈与する徳の形象である太陽の没落の際に放つの黄金色の輝きである。蛇は永遠回帰思想を表わす。それゆえ太陽に巻き付く蛇が黄金色であるのは、最高の認識である永遠回帰思想である。永遠回帰思想の告知をし、贈与しつつ没落するということが、この杖の意味である。

序説第一節から明らかなように、太陽は贈与する徳の象徴である。没落はそれゆえ太陽の没落と重ねられており、贈与しつつ、下界に、新しい朝に光をもたらす道行きである。だが、没落して行く者が自らを祝福する三度目の下山は、大いなる

正午である。大いなる正午は、ツアラトウストラが永遠回帰思想を彼の子供達に教える時である。それは、第四部最終章「徴」から推論される。永遠回帰の教師というツアラトウストラの運命は、贈与しつつ没落するという形で終わるのだが、それは、永遠回帰思想の告知と不可分である。告知は黄金の球を投げ渡すということであり、投げ渡された者が更に投げるといふのは、告知された者が更に告知者となるということである。永遠性と世界の完成は、黄金の丸い輪、黄金の丸い球として表現されている。黄金の丸い球は投げ渡された者が更に投げるといふ告知の連鎖である。大いなる正午において行われる祝福される没落は、永遠回帰思想の告知という黄金の球の投げ渡しである。永遠回帰思想は、黄金の思想なのである。

## 2 鉛から永遠回帰思想へ

『ツアラトウストラ』第三部「幻影と謎」において、ツアラトウストラは明確な形で始めて永遠回帰思想を語る。さらにこの章において、黒く重い蛇を噛み切る牧人の変容は、永遠回帰思想の肯定を示唆している。「幻影と謎」に定位して永遠回帰思想を錬金術的観点から読み解くことが本節の課題である。はじめに、「幻影と謎」における小人とツアラトウストラの言葉に注目しよう。

「私ツアラトウストラは」上って、——靈(der Geist)に反抗して、下るようにと私の足を引つ張る靈、深淵へと下るよう引つ張る、重さの靈に反抗して、私の悪魔(der Teufel)にして不倶戴天の敵に反抗して。／(私ツアラトウストラは)上って、——半ばは小人、半ばはもぐらであるこの靈が私の上に座っていたにもかかわらず、足の麻痺した、そして足を麻痺させるこの靈が、私の耳の中へ鉛(das Blei)を、鉛のしずくの思想(die Bleitropfen-Gedanken)を私の脳へと滴らせながら(座っていたにもかかわらず)。／『おお、ツアラトウストラよ』彼(重さの靈)は、嘲笑的に音節を区切りながら、ささやいた。『お前、知恵の石よ、(du Stein der Weisheit)お前はお前自身を高く投げた、しかし、いずれの投げられた石も必ず



―落ちるのだ。』(KSA.4.198)

ツアラトウストラの敵が、ツアラトウストラの耳の穴へ鉛を、ツアラトウストラの脳の中へは鉛のしずくの思想を注ぎ込む。鉛を耳へ注ぐことは、実際に中世で行われていた拷問であり、それゆえ、前記の鉛に関しては従来、その拷問を示している」と解釈されている。

鉛を拷問であると捉えると何が明らかになるのか。鉛は人体に有害であり、重い金属である。重いということは、重さの霊の属性であろう。鉛を耳の中に注げばそれは、耐え難い苦痛となるだろう。耳は脳につながっており、耳に鉛を注ぐということは、脳に鉛を注ぐということでもある。当然ながら溶かした鉛を注ぐのだから、この拷問は、死に至らしめるだろう。それほどのことをするということは、重さの霊がツアラトウストラの敵にして悪魔であるものとして苦痛を与えているということを示すだろう。

しかし、鉛を注ぐということを拷問であると解釈することは、これ以上のことを明らかにしはしない。我々は、鉛を注ぐということから二つの問題を説明しなくてはならない。

一つ目は、「幻影と謎」という章全体及び『ツアラトウストラ』全体を解釈する上での疑問である。つまり、「幻影と謎」は永遠回帰思想を主題としている。永遠回帰思想と鉛を注ぐということの関係はあるのか。ツアラトウストラと彼の敵・重さの霊を叙述した箇所が、永遠回帰思想という『ツアラトウストラ』の根本思想にして、ツアラトウストラの運命であり、この章の主題であるものと無関係であるはずはないだろう。

二つ目は、小人の言葉をどう解釈するかということである。小人が鉛の思想を注ぐということは、小人の言葉が鉛の思想だということである。そして、知恵の石とは何かである。小人の言葉を繰り返そう。『おお、ツアラトウストラよ、(中略)お前、知恵の石よ、(du Stein der Weisheit) お前はお前自身を高く投げた、しかし、いずれの投げられた石も必ず―落ちるのだ。』(KSA.4.198)

ツアラトウストラを「知恵の石」と呼び、石は必ず落ちるといふことは、一体何を意味するのか。この言葉の直前に現れる「鉛」・「鉛の思想」を拷問として理解すれば、この疑問に答えは出ない。

小人はツアラトウストラを「知恵の石 (du Stein der Weisheit)」と呼ぶ。これこそが鍵である。「知恵の石 (du Stein der Weisheit)」は直ちに「賢者の石 (der Stein der Weisen)」を想起させる。賢者の石とは錬金術において、広義ではあらゆる物質を金銀に変える力を持つ石であり、狭義では卑金属を貴金属、特に金に変える力を持つ石である。賢者の石は、哲学の石、化金石、第5元素とも言われる。<sup>(7)</sup>

ニーチェが賢者の石について知っているのは確実である。「賢者の石」という語は、『善悪の彼岸』186番及びその草稿に、「錬金術」(die Alchemie = Alchimie、およびその変化形など) という言葉は、『曙光』第二書103番や遺稿等に見出すことが出来る。また、一八八二年十二月二十五日付けのオーヴァーベック宛ての手紙にも登場している。<sup>(8)</sup> また、序で引用したようにニーチェはパラケルススについてもかなり知っている。<sup>(9)</sup>

それゆえ、我々は「知恵の石」を「賢者の石」を示唆するものとして解釈する際、錬金術については、パラケルススの説を取らねばならない。まず、パラケルススにおける鉛 (das Blei)、「賢者の石 (der Stein der Weisen, Lapis Philosophorum)」、錬金術 (die Alchemie = Alchimie) の概念を概観しよう。

賢者の石は、基本的に金属を黄金に転換する物質である。パラケルススは、「錬金術の意味するところは、まだ完成していない何物かをその終末へと運ぶことである」(JJP.S.141)と述べる。<sup>(10)</sup> 終末とは、最終物質 (Ultima materia) へと発展されたということの意味している。最終物質とは、以下の引用から、「最後の本質」であることが分かる。

「したがって、次の事を理解すべきである、錬金術とは不純なものを純粋なものへと変える技術に他ならない。……それは不要なものから有用なものを分離し、そして、その有用なものの最終物質とその最後の本質へと変質させることが出来る。」

(JJP.S.143)

小人は、知恵の石であるツアラトウストラに鉛の思想を注ぎ込んでいる。この事は、賢者の石に鉛を注ぐということ、つまり黄金生成というモチーフを暗示しているだろう。

ところで、「幻影と謎」は、ツアラトウストラと小人との対決でもある。この対決はツアラトウストラの深淵的な思想と鉛の思想との対決である。小人はペシミズムの思想を語る。

『おお、ツアラトウストラよ…… お前、知恵の石よ、(Du Stein der Weisheit) お前はお前自身を高く投げた、しかし、いずれの投げられた石も必ず — 落ちるのだノ / おお、ツアラトウストラよ、お前、知恵の石よ、お前、投石器(弩)の石よ、お前、星を打ち砕く者よ (du Stern-Zertrümmere) / お前自身をお前はそんなに高く投げた、 — しかし、いずれの投げられた石も必ず — 落ちるのだノ / (お前ツアラトウストラは) お前自身の刑として有罪であり、投石による死刑 (die Steinigung) がふさわしい。おお、ツアラトウストラよ、お前は確かにその石を遠く投げた、 — しかし、お前の上に石は再び落ちてくるだろう、』 (KSA. 4.198)

投げられた石は必ず落ちる。高みに至っても必ず降下する。しかも投げた者の上に、もとの所に。これは投げてでも無駄であり (umsonst)、むなし (leer, eitel) ということを表わしている。『ツアラトウストラ』の「幻影と謎」部分の草稿全てにおいて、小人はツアラトウストラを知恵の石 (du Stein der Weisheit) と呼び、いかなる石も必ず落ちるといふ内容が描かれている。石は投げてでも無駄である、元の所に落ちてくるのだから。これは、一切は空しいというペシミズムの思想である。更に、「幻影と謎」の当該箇所の草稿に、石が落ちることに関して leer と記しているものがある。石がいずれ帰ってくる (zurückkehren) と言った後に小人は以下のように言う。

「お前 (ツアラトウストラ) は探す、しかしお前が探す所は、不毛であり、常に空しい (leer) のだ、いまや不毛の地が永遠である。」<sup>11)</sup>

このように、小人の注ぐ鉛の思想はペシミズムの思想である。しかも小人は草稿の段階では永遠という語を持ち出してい

る。小人はツアラトウストラに対して、一切の行為は永遠に無駄であり、空しいというペシミズムの基本的思想を語っている。それに対するツアラトウストラの深淵的思想は永遠回帰思想である。次のように明確に永遠回帰思想は語られる。この回帰は、同じものの永遠回帰である。

「そして回帰し、そしてあのもう一つの小道を走る、我々の前に向こうへと伸びるあの小道を、この長い恐ろしい小道を——我々は永遠に回帰しなくてはならないのか？——」(KSA.4.200)

ツアラトウストラが彼の敵と対峙する決定的な思想は、永遠回帰思想である。小人は永遠回帰思想を知らない。

『「待て！小人よ！」と私は語った。『私か！それともお前か！』ところで私が我々二人の間では、より強き者である。——というのも、お前は私の深淵的思想を知らない！この思想を——お前は持ち堪えることが出来ない！』」(KSA.4.199)

「私かお前か」という言葉は、闘いの姿勢表明である。小人が永遠回帰思想を知らず、更にそれを担うことが出来ないということが、ツアラトウストラの優位を示している。小人の鉛の思想と永遠回帰思想は、単なるペシミズムと極限化されたペシミズムという関係である。ツアラトウストラは、ペシミズムに対して永遠回帰思想というより担うに重き思想でもって挑むのである。

ここで、パラケルススにおいて錬金術が「不純なものを純粹なものへ変える」ことであつたことを想起しよう。小人のペシミズムは、単なるペシミズムとして「まだ完成していない」(J.P.S.14)し、「最後の本質」に至っていない。小人の思想を賢者の石ツアラトウストラは永遠回帰思想という最も重い思想へ、すなわちペシミズムの完全形態、「最後の本質」へと転換する。鉛の思想はペシミズムを表わすが、永遠回帰思想は、ペシミズムの極限化である。すなわち、一回限りの生における空しさは、死ねば終わりである。しかし、永遠回帰思想は、同じものの永遠回帰であり、永遠に同じ姿で繰り返しかえってくるという空しさである。永遠回帰思想の内では、死んでも同じ生が回帰してくるのだから、死ねば終わりという一回限りの生の空しさとは比べようもない空しさがある。通常のペシミズムという重い思想を原物質として、賢者の石ツアラトウ

ストラは、最も重い思想永遠回帰思想へと変容させる。

思想と思想の対決は、このように進むが、なぜ永遠回帰思想がここで出てきたのか。小人との対決において、鉛の思想が永遠回帰思想へと変容するという形で押さえることが出来る。しかしツアラトウストラはどのようにして永遠回帰思想へと転化させるのか。その答えは、ツアラトウストラが勇氣について語ることから見出せる。

小人に立ち向かうには、「勇氣(KSA.4.198)」を要する。小人が語り終え、沈黙を長く続けたのだが、それはツアラトウストラの苦痛となっている。

「彼の沈黙はしかし私に圧力をかける。一人である時よりもこのように二人である時の方がまことに孤独である。」(KSA.4.198)

ツアラトウストラが「上り、夢を見、考え」ても「一切は私に圧力をかける」(KSA.4.198)と述べるように、彼はかなりの痛手を被っている。勇氣は殺害する勇氣であり、これによって小人と対決の姿勢をあらわにする。

「しかし、私の中には私が勇氣(der Muth)と呼ぶものが何かがある。この勇氣は、これまで私のいずれの無勇氣(der Unmuth)をもたたき殺した。ついに、この勇氣は私に立ち止まれ、そして語れと命じた。小人よ！お前か！それとも私か！」(KSA.4.198)

つまり、小人と立ち向かうことは、彼にとって「勇氣」が必要なことであり、その勇氣とは、永遠回帰の深淵を覗き込むことすら出来る勇氣である。勇氣についてのツアラトウストラの最後の言葉は、勇氣によって、死も永遠回帰をも克服することを示している。

「勇氣はしかし、最も優れた撲殺者(der Todtschläger)である、勇氣、これは攻撃する。勇氣は死びなえも打ち殺す(todtschlagen)」、というのも、勇氣は次のように語るからだ。『これが生であったのか？よし！もう一度！』(KSA.4.199)

勇氣が語られるのは、小人との対決のためであるが、そのことによって、永遠回帰思想がこの章に登場する。小人に鉛の

思想・ペシミズムを注がれたツアラトウストラはかなりのダメージを受け、勇気について語る。勇気は小人との対決に必要なものであるが、勇気は同時に深淵を覗き込む勇気であり、永遠回帰思想の深淵を見る勇気である。「これが生であつたか、もう一度」という言葉は、永遠回帰思想と向き合う勇気である。勇気についてツアラトウストラが語ることによって、永遠回帰思想は「幻影と謎」に登場するのである。賢者の石ツアラトウストラの金属変換は勇気を喚起することによって行われる。

賢者の石はパラケルススにおいてアルカナム(Arcanum)の一つである。アルカナこそは、「神的な治療の力のように、我々を変える力、新たにする力、そして復活させる力を持っている」(JJP.S.198)ものである。

小人の言葉によってツアラトウストラは「一人の病人こそ私に似ていた、悪しき責め苦に疲れ、そして二度より悪しき夢によって眠りを覚まされるような病人」(KSA4.198)のような状態になる。しかし、賢者の石ツアラトウストラは勇気によって再び立ち上がったのである。そこには、アルカナの力及び鉛の思想から永遠回帰思想への転換ということが存在している。

小人はツアラトウストラに鉛の思想を注ぎ、ツアラトウストラを知恵の石賢者の石と呼んだ。小人の言葉は、作品論的にはペシミズムという鉛を賢者の石に注ぎ込むという舞台設定である。そこでツアラトウストラは、賢者の石としてペシミズムに落胆した自分を「変化させ、転換せしめ、新たにし、再び立ち上がらせ」た。そして賢者の石ツアラトウストラは、単なるペシミズムを極限のペシミズムをも包含する永遠回帰思想へと変化させた。それは、「幻影と謎」において勇気という話題が唐突に語られ始めることの内実である。

再び立ち上がったツアラトウストラであるからこそ、小人との対決は「お前か私か」から勇気についての語りにおける永遠回帰思想という深淵を覗き込む勇気を得たため、「私かお前か」になり、小人に対して永遠回帰思想というツアラトウストラにしか担えない思想でもって対決するようになるのである。ツアラトウストラが永遠回帰思想を語り始めるのは、小人が

鉛と賢者の石という要素を提示し、ツアラトウストラは賢者の石として闘う勇気を新たにし、ペシズムをペシズムの極限化である永遠回帰思想へと転換せしめたのである。ツアラトウストラは自ら賢者の石であり、その賢者の石の力を操ることの出来る錬金術師である。しかし、鉛は更に黄金へと変容しなければならぬ。

第三部「幻影と謎」第二節において牧人は、最も重く黒い思想、すなわち最も重い思想としての永遠回帰思想である重く黒い蛇を噛み切る(KSA.4.201f.)。すると、牧人も最も重く重い思想も変化する。牧人の場面は、「比喩における」、「一つの幻影であり、そして一つの予見」(KSA.4.202)である。それは、ツアラトウストラが牧人であるということである。このことは、第三部「回復する者」において実現される。「深淵的な思想」(KSA.4.270)が語り、ツアラトウストラは牧人同様に「喉に這い込」まれ、「頭を噛み切り、私の中から吐き捨てた」(KSA.4.273)。しかし注目すべきは「幻影と謎」における牧人が蛇の頭を噛み切って吐き捨てた際の変容である。

「もはや牧人ではない、もはや人間ではない、——一人の変容した者、光に包まれた者(en Umleuchter)、その様な者は笑った！地上では一度も、どの人間も、彼が笑うようには笑ったことはない。」(KSA.4.202)

彼の笑いは「どんな人間の笑いでもないような笑い」(ibid.)である。この変容は一般に牧人が永遠回帰思想を克服し超人になったと解釈されている。しかし本論は、変容した者が光に包まれた者であるということに注目する。そして、ツアラトウストラは牧人であるのだから、光に包まれた者になることは、ツアラトウストラの目標でもある。光に包まれる(sich umleuchten)ということは、黄金を暗示している。というのは、光と黄金は固く結びついたモチーフだからである。贈与する徳も大なる正午において捉えれば、永遠回帰思想を告知して没落して行く光である。

「ただ最も高い徳の似姿(das Abbild)としてのみ、黄金は最も高い価値となったのだ。黄金のように贈与する者の眼差しは光り輝く(leuchten)。」(KSA.4.97)

更に、黄金の輝きは、永遠回帰思想の肯定的側面を彩るものである。小人によって鉛の思想・ペシミズムを注がれたツアラトゥストラは、最も重い思想・永遠回帰思想へと変化させた。これは、賢者の石としてのツアラトゥストラの力である。そして牧人ツアラトゥストラが、最も重く黒い思想を噛み切り光に包まれた思想へと変容させる。光り輝きは本論文第一節で述べたように、黄金と結びついており、それは、永遠回帰思想を飾るものである。ツアラトゥストラはペシミズムから永遠回帰思想の否定的側面へ、そして更に否定的側面を克服し肯定的側面へと、変化させる。これは、鉛の思想から最も重い思想としての永遠回帰思想、そして黄金の永遠回帰思想へという変容であり、錬金術の変換である。小人のペシミズムを究極のペシミズムとしての永遠回帰思想とその最後の本質永遠回帰の肯定へと導くことは、パラケルススの言葉「有用なものを不要なものから分離し」、「最終物質とその最後の本質へと変質させる」(J.P.S.143)ということである。ツアラトゥストラは自ら賢者の石にして、錬金術師である。ツアラトゥストラを賢者の石であると考えることによって、第三部「幻影と謎」は、その主題永遠回帰思想について錬金術的見地から解釈された。

### 3 錬金術師としてのツアラトゥストラ

「哲学者の金は鉛である (Aurum philosophorum est plumbum)」一五八二年パーゼルにおいて出版された錬金術的著作『パンドラ』に、パラケルススはこのように書いた(J.J.S.235)。鉛は哲学者にとつては金ほどの価値を持つ。鉛という暗黒<sup>(13)</sup>面に目をむけることが金ほどに重要である。更に、賢者の石は哲学者の石であり、哲学者こそが、鉛を金に変質させる者である。哲学者でなければ鉛に意味を見出せない。哲学者は錬金術者なのである。

永遠回帰思想は、黄金に彩られた思想であり、第三部「幻影と謎」における小人の言葉には、鉛の思想を賢者の石に注ぐという錬金術的モチーフが認められた。『ツアラトゥストラ』には鉛の思想を最も重い思想へ、そして黄金の思想へという変



容が存在する。すなわち、ペシミズムを最も重いペシミズムという永遠回帰の否定的側面へ、そしてペシミズムを克服して永遠回帰思想を肯定した者の境地へとという変化である。このように第三部「幻影と謎」を永遠回帰思想の内での統一的に捉えることが出来た。永遠回帰思想は錬金術的観点で解釈された。これは、鉛を注ぐということと拷問と捉えることではなく、賢者の石ツアラトウストラに定位したことによって得られた成果である。「幻影と謎」において、ツアラトウストラが賢者の石であることによつて、初めて永遠回帰思想が明確に語られるのだ。それも、鉛による痛手を賢者の石ツアラトウストラが勇氣をもつて深淵を覗き込むことによつてはじめて永遠回帰思想は登場する。勇氣による回復は、アルカナとしての賢者の石による復活と新生、思想の転換である。大いなる正午においてツアラトウストラは永遠回帰思想を一つの希望の子供達に告知すると考えられる。そしてそれが、ツアラトウストラの没落の終わりである。告知は黄金の球を投げ渡すということである。永遠回帰思想の肯定に至つて初めてツアラトウストラは、黄金の球を投げ渡すことが出来るのである。

本論はペシミズムと永遠回帰思想の関係を錬金術的見地から説明してきたが、このことは他のテキストにも妥当する。『ツアラトウストラ』は肯定の書である。そしてその後の著作は「否を言う部分、否を行う半分」(EHKSA6:350)、すなわち否定の書である。そもそも永遠回帰思想は否定の書と位置づけられるテキストにおいてあまり語られない。しかし否定の書『善悪の彼岸』においてもペシミズムと錬金術の関わりを指摘することが出来る。それは、シヨールペンハウアーの問題である。

『善悪の彼岸』186番においてシヨールペンハウアーからの引用の中に「賢者の石」(JGBKSA.5:106)という言葉が登場する。この問題は、哲学者が道德の基礎付けを欲するということである。ニーチェが批判するシヨールペンハウアーの主張は、同情こそが倫理学の眞の礎石であり、賢者の石のように求められてきたものであるということである(ibid.)。道德の問題に関して、シヨールペンハウアーはペシミストとして道德に対応していないというのがニーチェの批判する力点である(JGBKSA.5:107)。<sup>(5)</sup>また、『善悪の彼岸』56番は、シヨールペンハウアーを道德に縛られた者であり、彼の哲学は素朴でキリスト教的であると述べ

る。ニーチェはここにおいて、自らをペシミストの中のペシミストとして位置づけている。ペシミズムを奥底まで考え抜いた者は、逆に、世界肯定的な人間の理想に対する目を得るようになり、同じ物の永遠回帰を肯定する「もう一度」を叫ぶ者となると述べている (GBKSA.5.74)。ここには、通常のペシミズムから奥底まで考えられたペシミズムへ、そして永遠回帰の肯定という本論が論証した錬金術的思想変容の段階が同じ形で存在している。本論の成果とこの二つの断章をあわせて読むと、賢者の石はショーペンハウアーが考えるように道德の基礎付けとなるものではなく、眞の賢者の石は道德をも否定してペシミズムを究極化することの方に存するといえるだろう。ペシミズムの追求、すなわち究極化によって、永遠回帰思想の「もう一度」という肯定の境地に達することが出来る。つまり、『ツァラトゥストラ』と同様に『善悪の彼岸』においても、ペシミズムから究極のペシミズムへ、そして最後に肯定的な境地しかも永遠回帰思想に達する変化が読み取れるのである。

このように、本論が論証したペシミズムから永遠回帰思想の否定的側面、そして肯定的側面へという二段階の錬金術的変容は、『善悪の彼岸』においても見出せる。このことは、ツァラトゥストラ以後のニーチェ思想を読み解く上で重要な示唆を与える。ショーペンハウアーの受容と離反というテーマに関しても同様である。

しかし本論で論証したことを確認しよう。永遠回帰思想は黄金に裝飾された光り輝く思想である。しかし黄金に至るには、鉛を最も重い思想へと変容させ、さらにそれを克服するという転換が必要であった。これは、ペシミズムから永遠回帰思想の否定的側面、そして肯定的側面への変化である。思想の変容は錬金術的転換であり、永遠回帰思想を担い、告知するという使命は、錬金術師ツァラトゥストラによって初めて可能となるのである。小人の言葉にある鉛、知恵の石ということに着目すること、すなわち錬金術的観点から「幻影と謎」及び永遠回帰思想を読み解くことが出来る。

かくして、序で引用した遺稿は次のように解釈される。

「パラケルススの驚くべき事ども。／（読んだり聞いたたりした事の） $\mu\zeta$ による自分の言葉で語り直し。――私がかつて見

て聞いた事のすべての驚くべき事の内、最も不思議な事の一つ——パラケルススが私にそれを物語るのだが——そして私はただ獅子のように勇氣ある心だけでなく、子羊のように無垢な忍耐をもまた持たねばならない。ちょうど自ら担わなくてはならないように、伝えねばならない。というのも、そのまやかしは、私にとつて悪しき意志を持つ靈のまやかしであると仮定すれば、私にとつて一つのより邪悪な誘惑では決してないだろうからだ。そして、それは語つた、私に現れてくるもの、それは真理——」(KSA.9.480. 11 [111])

パラケルススの言行はニーチェにとつて最も驚かせる事であり、不思議な事であるが、そこでニーチェは決意する。獅子の勇氣だけではなく忍耐を持たねばならないということ。獅子の勇氣は、『ツアラトゥストラ』において重要なモチーフである。勇氣と忍耐を兼ね備えて自ら担い伝えるとは、永遠回帰思想を覗き込む勇氣、担う力、伝える獅子の勇氣をもつて、永遠回帰思想の教師として歩むということである。永遠回帰思想を自ら担い、伝えるということは、ツアラトゥストラにしか出来ない。悪しき意志を持つ靈とは、ツアラトゥストラの悪魔にして不倶戴天の敵である重さの靈(小人)であろう。小人が語る思想はペシミズム・鉛の思想である。小人はツアラトゥストラを賢者の石であり、石の至つた高みは無駄であると言ふ。これが小人のしかける試練、誘惑である。しかし、ツアラトゥストラにとつてそれはペシミズムへと誘う邪悪な誘惑ではない。小人のまやかしの言葉は、結局のところ、賢者の石ツアラトゥストラによつて永遠回帰思想へと変化するのだから。錬金術的思想転換は、一つの誘惑を通して行われる。錬金術師としてのツアラトゥストラ、彼は次のように語るだろう。「私に現れてくるもの、それは真理、すなわち永遠回帰思想である。」

## 註

ニーチェのテキストは次のものを使用。Friedrich Nietzsche, *Sämtliche Werke Kritische Studienausgabe in 15 Einzelbänden*, hrsg.

von Giorgio Coli und Mazzino Montinari, DTV & Walter de Gruyter, München, Berlin/New York, 1988. 以下、(KSA)と略ぶ。巻数、ページ数を表示。遺稿に関しては遺稿整理番号も付す。引用中の／記号はテクストの改行を示す。また、引用中の（ ）内における訳語は、筆者が補って訳したものである。

- (1) *Also sprach Zarathustra* (KSA 4) 以下『ツァラトゥストラ』と略記。
- (2) 「この作品(ツァラトゥストラ)の根本概念、永遠回帰思想(一般に到達することのできるだろう)この肯定の最高の形式」。(KSA, 6.335) *Ecce homo*. *Also sprach Zarathustra*. I. 以下、EHと略記。
- (3) 一八七三年の遺稿で明らかである。(KSA 7.571. 26 [1]. Frühjahr 1873)
- (4) ニーチェに対する錬金術的背景からの研究は筆者の知る限りこれまでなされていない。ヘーゲルに対しては Jacques D'Hondt が緻密な研究をしている。Löwith は *Von Hegel zu Nietzsche* においてツァラトゥストラのバラの冠に関してルターの紋章薔薇十字の象徴が転倒されたとコメントするが、あくまでキリスト教の転倒という文脈である。
- (5) 第四部「正午」では、「年老いた正午」が眠っていると語られる。これは黄金の幸福の、黄金の葡萄酒の、古い、褐色の「一滴」を飲んでいる。また、第四部「正午」における正午は、第四部「夜を彷徨う者の歌」における「真夜中＝正午」の正午をさしている。
- (6) ただし、朝の太陽に喩えられている。ツァラトゥストラがこれから大いなる正午を迎えるために下山するためである。
- (7) 錬金術師や結社によって異同はあるが、本論はニーチェが明確に意識しているパラケルススの説を用いる。
- (8) *Nietzsche Briefwechsel Kritische Gesamtausgabe*, III. 1. Walter de Gruyter, 1981, S.312 (365番) オーヴァーベック宛ての手紙は幾分冗談めいてくる。
- (9) Paracelsus の本名は、Theophrastus von Hohenheim。基本的に放浪の医者。「医学のルター (Lutherus medicorum)」と呼ばれる。一四九三—一五四一年。一五二七年二月バーゼル大学医学部教授になるが、講義でドイツ語を使用したり、アヴィセンナの『医学規範』を焚書したため、翌年にバーゼル市を退去。彼の著作は、医学、神学、哲学の分野に及ぶ。パラケルススの著作は基本的に初期新高地ドイツ語である。今回は、J. Jacobi によるパラケルスス選集を用いた。

- (10) Jolande Jacobi, *Paracelsus Selected Writings*, Princeton University Press, 1995 (pbk.) の「Jヤコビによる著述はJ」と略記、同書におけるパラケルススのテクニストはJJPと略記。(JJ.S.255)
- (11) Marie-Luise Hasse und Mazzino Montinari, *Nachbericht zum ersten Band der sechsten Abteilung. Also sprach Zarathustra*, *Nietzsche Werk. Kritische Gesamtausgabe, 6 Abteilung 4 Band*, Walter de Gruyter, Berlin/New York, 1991.S.337
- (12) 第二部「予言者」において登場する予言者の言葉がペシミズムとしてここに登場するが、これは単なるペシミズムである。また予言者の言葉は、『旧約聖書』コヘレトの言葉(Der Prediger Salomo)に由来する。(参考文献：吉沢伝三郎、『ニーチェと実存主義』、理想社、昭和44年)。
- (13) Jヤコビによれば、鉛は「単に金属を意味せず、暗黒の重い」ものの錬金術的象徴である(JJ.S.255)。
- (14) 『ツアラトゥストラ』の根本概念が「肯定の最高の形式」(EH.KSA.6.335)であり、また『ツアラトゥストラ』によって「私の課題の内然りを言う部分が解決された」(EH.KSA.6.350)と述べるように、『ツアラトゥストラ』は肯定の書である。
- (15) ショーペンハウアーは神と世界を否定するが、道徳を否定しないという点で真のペシミストではない(KSA.5.107)。

(本学大学院博士課程・倫理学)